

文芸川柳の二五〇年。

二〇〇七年は、川柳が雑俳から独立ジャンルとしてのアイデンティティを確立し、「川柳」という名称が世に現れて二五〇年。
二〇一五年は、「川柳」の文芸性が確立されて二五〇年の節目にあたる。
江戸期に誕生し、現在ではニンゲン詩、社会詩として川柳が花開いた足跡を追う。

こ

うく／＼のしたいじぶんにおやハなし
「実行のしたい時分に親はなし」天福四年
という句は、「これは古川柳だ」などと
いう認識の前に、お袋が私の口こたえを戒める際の
道徳的「成語」として聞かされた。この他にも
はへ、立たて、バ、あゆめの親、ころ
（道徳的戒めとしての親）ころ 廿八 明和五年
などもよく知られたフレーズ。また、女性に年を聞
くのは失礼というとき、
相「しやうハ聞きたし年ハかくしたし
（相性は聞きたし年は隠したし） 明和六年
のフレーズを相母に教えられた。いずれも、江戸川
柳が口から口へと伝わり人口に膾炙して成語化した
もの。十七音形式で世に伝わってきた。

ところで、相性の句は、前句附句合の課題「さ
まざまな事／＼」という前句に付けられたもの。本
来、前句との付け味、響きあいを楽しむことが目的。
もし、前句と附句の関係だけを楽しむ前句附句遊びで
終始していたら、川柳は雑俳のひとつとして今も扱
われていたことだろう。

川柳が、文芸として雑俳から独立ジャンルのアイ
デンティティを獲得するためには、十七音で独立鑑
賞されることが重要であった。

昭和二年（二七六五）に刊行され
た『講風柳多留』初篇の序にお
いて、編者・興隆軒可有が「一句
にて句意の分りやすき」を挙げ
て一番とした編集方針が、そのま
ま川柳という文芸確立への指針に
もなっている。

さる二〇〇七年の「川柳二五〇
年」は、「川柳」という名称が世
に現われて二五〇年の節目だった
が、来る二〇一五年は、文芸とし
て川柳が確立される契機となった
「柳多留二五〇年」の大きな節目
になる。

俗に和歌一〇〇〇年、俳句五〇〇年に比べたら、
まだまだ若い文芸だが、川柳は、この二五〇年間に
ニンゲンを見据えた多くの作品を生んできた。

さて、この文芸名が、ひとりの点者「選者」である
無名庵川柳こと柄井八右衛門に因むことは、ご存知
の通りだが、江戸の前句附句者としても後発であ
った川柳という人が、その優れた選句眼によって、

付加えれば、「講風柳多留」編集の手本にもな
ったと思われる「講武玉川」という俳諧の高点句
集を撰じた慶應義塾の菩提所・龍泉寺も台東区谷中
にある。これまた今年の五月八日には「紀逸没後二五
〇年」の節目を迎える。

紀逸の「武玉川」は、俳諧の附句（十七音の長句と
十四音の短句がある）をそれぞれ独立鑑賞する方向性
を打ち出し、川柳という文芸形成の担形にもなった。

津浪の町の捕小命日 武后
という武玉川の短句は、昨年の三・一一を経験した
私にとっても重い作品だが、前句によらずとも
鑑賞できる最短期形式をしっかりと示している。

「講武玉川」、「講風柳多留」のいずれも、江戸と
いう地で独自の文化が成熟し、上方文化から脱却し
た江戸独自の価値観が花開く時期に生まれた。
二〇一五年、その文芸として確立した川柳が二五
〇年を迎えようとする今日、メディアや企業公衆で
もブームとなり、さらには、短詩文芸として川柳誌
の発行やコンクールが行われ、江戸期の客観表現は
かりでなく、作者自身の表現としての主観をもち手
入れ幅広く成長した。

私は、東京人の一人として、この地で生まれた俳
句とは異なるニンゲン詩、社会詩としての川柳に改
めて誇りを感じている。

興隆軒可有は、下谷に
住み、「講風柳多留」
の版元・花屋久次郎
は、上野山下にあった。
この現在の台東区成
の三人によって、川柳は、
他の前句附句合との違
いを明確にしていく。
言い換えれば、川柳は、
江戸という都会でこそ
発祥した文芸であると
もいえよう。

組織化され、さらに宗家意識が高まると、川柳号の継承に当た
ってのいざこざも生じ、七代川柳は、画像手にすることなく号
だけを継承、やっとな代目に返ると、九代目川柳選挙では一派
を二つに割っての争い。結果、八代目に次を任せられ、画像を手に
していた菅原雪々太こと中村万吉は選挙で負けたにも関わらず
画像を掲げるところに「正風亭川柳」と名乗り、選挙で勝った高治橋
義母子こと前島和橋は「緑亭川柳」と名乗り、二人の川柳が対立
する異常事態が発生します。画像を手にできなかった和橋は、自
ら製作した（元祖柄井川柳翁像）を新しい「語り物」として十代
目以降に継承しました。

今日、（元祖川柳翁像）は、川柳家とは無関係の個人蔵とし
て保存され、和橋の描いた（元祖柄井川柳翁像）が、十五代目川
柳を嗣号した藤屋川柳氏の元に保管されています。

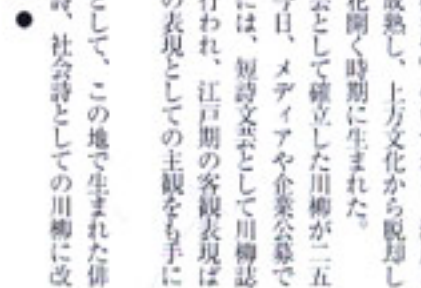
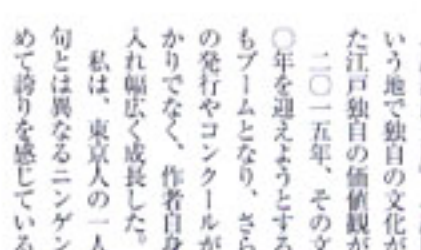
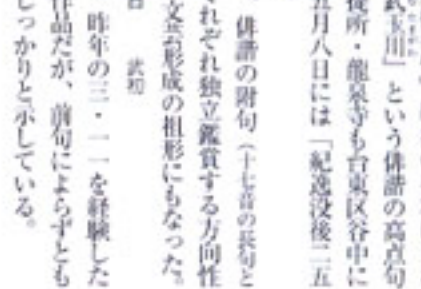
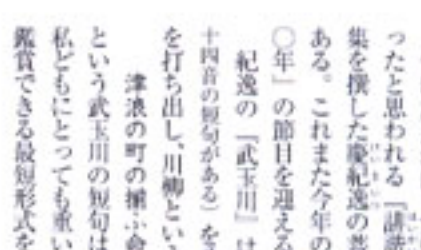
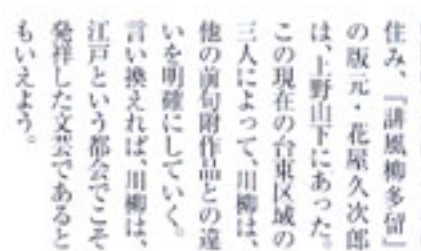
これらの画像は、川柳の栄枯盛衰とニンゲンの名譽慾を横目に、
また手にした者には大きな責任と負担を負わせる事により、幸福
ばかりではない一面も与えてきました。

それでも川柳像は、今も静かに微笑んでいます。

右・秋月川柳像。
寛政3年
〔柳多留〕24篇
所蔵・朱雀河文庫
中・元祖川柳翁像。
天保3年
長谷川等雪画
〔個人蔵・朱雀河文庫写
真データベース〕
左・元祖柄井川柳翁像
明治26年
〔所蔵・15代藤屋川柳氏〕



慶應義塾(左)と「講武玉川」三編表紙(右)
宝暦2年刊(所蔵・朱雀河文庫)



右・秋月川柳像。
寛政3年
〔柳多留〕24篇
所蔵・朱雀河文庫
中・元祖川柳翁像。
天保3年
長谷川等雪画
〔個人蔵・朱雀河文庫写
真データベース〕
左・元祖柄井川柳翁像
明治26年
〔所蔵・15代藤屋川柳氏〕

受け継がれる川柳像。

（川柳）という文芸名が、1人の前句附句者（号）に由来して
いる事はご存知の通りです。

「元祖」とか「柳祖」と呼ばれ、後の川柳家にとっては大切な存
在となりました。亡くなる直前に描かれた（秋月川柳像）は、彩
色された内筆浮世絵で、初代川柳没後に刊行された『講風柳多留』
24篇には、この絵を元にした丸窓の川柳像の口絵が掲載されま
した。

（秋月川柳像）は、息子の二代、三代川柳に受け継がれますが、
選者としての三代は、ワケあって隠退。血の繋がりのない四世川
柳こと八丁屋の物吉同心・人見勘助に画像とともに川柳の点式を
譲ります。しかしこの画像は、文政の江戸大火で人見氏の屋敷で
焼失。四世は、残っていた東横画の下絵を画師・長谷川等雪に託
し、新しい（元祖川柳翁像）を複製します。以後、画像は、初
代川柳の（印）とともに代々の川柳への「語り物」として川柳嗣
号者の象徴になります。

組織化され、さらに宗家意識が高まると、川柳号の継承に当た
ってのいざこざも生じ、七代川柳は、画像手にすることなく号
だけを継承、やっとな代目に返ると、九代目川柳選挙では一派
を二つに割っての争い。結果、八代目に次を任せられ、画像を手に
していた菅原雪々太こと中村万吉は選挙で負けたにも関わらず
画像を掲げるところに「正風亭川柳」と名乗り、選挙で勝った高治橋
義母子こと前島和橋は「緑亭川柳」と名乗り、二人の川柳が対立
する異常事態が発生します。画像を手にできなかった和橋は、自
ら製作した（元祖柄井川柳翁像）を新しい「語り物」として十代
目以降に継承しました。

今日、（元祖川柳翁像）は、川柳家とは無関係の個人蔵とし
て保存され、和橋の描いた（元祖柄井川柳翁像）が、十五代目川
柳を嗣号した藤屋川柳氏の元に保管されています。

これらの画像は、川柳の栄枯盛衰とニンゲンの名譽慾を横目に、
また手にした者には大きな責任と負担を負わせる事により、幸福
ばかりではない一面も与えてきました。

それでも川柳像は、今も静かに微笑んでいます。



右・秋月川柳像。
寛政3年
〔柳多留〕24篇
所蔵・朱雀河文庫
中・元祖川柳翁像。
天保3年
長谷川等雪画
〔個人蔵・朱雀河文庫写
真データベース〕
左・元祖柄井川柳翁像
明治26年
〔所蔵・15代藤屋川柳氏〕

尾藤一泉

びとう いっせん 川柳家。1900年東京生まれ。「川柳さくらぎ」主宰。
女子美術大学、武蔵野美術大学ほか非常勤講師。
『川柳公談』、川柳学会、全日本川柳協会等に所属。
川柳を生活の中の文化として川柳展など川柳行事の開催に努め、
著述や講演、講座等を通して川柳の楽しみを伝える。
サイト <http://www.doctor-senryu.com/> (ドクター川柳) など。
主な編著書に、『川柳総合大事典』『川柳のたのしみ』『鶴柳の川柳と句び』
『地蔵と川柳』ほか、主な句集に『門前の道』『門前の道II』など。

『講風柳多留』初篇の表紙と興隆軒可有の序。
明治2年刊(所蔵・朱雀河文庫蔵)



『講風柳多留』初篇の表紙と興隆軒可有の序。
明治2年刊(所蔵・朱雀河文庫蔵)

古川柳時代



発祥
宝暦七年(一七五七)八月二十五日
川柳評万句合初開キ

初代川柳歌
川柳評万句合歌次歌の図

世帯人情を穿った川柳評の都会的作品は、江戸っ子の心を捉え、江戸随一の点者に成長。

文芸性確立
「講風柳多留」出版
明和二年(一七六五)七月



「講風柳多留」の刊行により前句から十七首の附句を独立して鑑賞する契機に。これが、後の文芸としての川柳というジャンル確立の基点となる。

初代川柳没
寛政二年(一七九〇)九月二十三日
初代川柳評万句合の終焉

鎌倉寺の初代川柳墓(上)と位牌(左)。毎年、九月二十三日(明治期は十月二十日)に川柳忌が行われている。



狂句時代

万句合から句会へ
文化元年(一八〇〇)〜
文政九年(一八二六) 伊風狂句(命名)



初代川柳没後、和蘭評を経て川柳の作句は万句合から句会形式に移りし、再び隆盛を取り戻す。大きな大会が開催され、神社仏閣への奉納額も盛んになるが、天保の改革を前後して、川柳は他に(狂句)と呼ばれるコトバ遊びの非文芸への道に落ちてゆく。

奉納額と大会



高尾山奉納額の浮世絵巻面



四世川柳の頃の句会風景

新川柳時代



明治の句会の
最古の写真

吟社川柳の時代

川柳中興
明治三十五年(一九〇二)



井上刺花坊

新聞「日本」の川柳欄の流行を機に各新聞は川柳募集欄を開設。読者と投句者をベースにした川柳結社が全国に生れる。特に阪井久良侯と井上刺花坊の両雄が、指導的役割を果たす。



明治の主な雑誌

川柳の吟社は、それぞれ主張をもって川柳の近代化、文芸性の追求を行い、川柳誌全盛時代へと進む。



マル珍狂句

明治十年(一八七七)

川柳界の外側のメディアにも川柳が広がり、文芸性復興への道を拓く。



明治15年に浅草寺に奉納された狂句額(所蔵・浅草寺)

明治柳風狂句

六代目川柳綱号
安政五年
明治柳風狂句へ



句会風景(上)と明治柳風狂句句会のチラシ(下)

宗家意識が高まると、格式ばかり先行して文芸性はさらに失われた。それでも大きな大会や奉納額は続けられ、明治期には全国に狂句作者の組織ができた。



絵本柳多留類のいろいろ

幕末
絵本柳多留類の流行
川柳に印刷術を添えた書籍が流行し川柳が社会へ浸透する大きな役割を果たす。



現代川柳

新傾向川柳
明治四十年代
「川柳を詩にしたい」

新傾向川柳の雑誌



西洋詩の流入は、客観表現主体の川柳に主観表現を持ち込み、マルチな表現形式へ。「川柳を詩にしたい」とは若き川柳家の大志。

新興川柳・翼賛川柳から戦後の目覚ましい復興



川柳研究書
ハワイのワイロー吟社

主張を持った川柳は、帝国主義の体制下にも独特の展開を見せ、戦後は戦場から川柳雑誌が雨後の筍のように隆盛した。川柳研究書、雑誌川柳、海外進出など幅広い活動が展開される。

六大家の時代
東西川柳界の交流の推進



川柳きやり二十周年記念で六大家が顔を揃える
日本川柳協会
第一回全日本川柳大会
昭和五十二年三月

メディア川柳の時代
平成サラリーマン川柳



川柳二五〇式典
平成十九年八月二十五日



二〇一二年〜二〇一五年のサラリーマン川柳

昭和62年以來、サラリーマン川柳が流行。メディアや企業の川柳を媒体にした公募企画が増える。反面、川柳界の高齢化が深刻化。川柳は2007年に「川柳発祥250年」を迎え、盛大な式典が行われた。

二〇一五年は「文芸川柳二五〇年」